

書 評

数学文章作法 推敲編

結城 浩 著，ちくま学芸文庫，2014 年

近畿大学理工学部
松井 優

○ 本書と著者の紹介

「数学文章作法」は「基礎編」と「推敲編」の2冊から成ります。タイトルからは論文指南書を想像する人もいるかもしれませんが。しかし、私たちの日常は、メール、ブログ、レポート、論文、教科書、そしてこの書評など、数学に関係した文章を書く機会にあふれています。この「数学文章作法」はそんな幅広い文章全般の書き方を説明した本です。特に本書「推敲編」は、一度書いた文章を正確で読みやすいものに書き直す方法が主眼となっています。その主張は、たった一つの単純明快な原則

読者のことを考える

です。それは、書いた文章が正しいかだけではなく、その文章で読者に正しく伝わるかを考えるということです。本書ではこの原則を具現化する方法を、多くの悪い例とその改善例を示しながら丁寧に説明しています。

本書の著者である結城浩氏は「数学ガール」シリーズの作者で、ほかにも入門書を多数執筆されています。2014年には日本数学会出版賞も受賞されており、その著書を読んだことがある人も多いことでしょう。本書は、そんな文章のプロがノウハウとコツを伝授してくれる贅沢な内容の本です。文章はとてもきれいでおもしろく、そして何より正確で読みやすく、普段文庫本を読まない人でも詰まることなくスラスラ読めます。本書は文章を書き直す方法を説明するものでありながら、この本自体が読みやすい文章のお手本となっています。

○ 本書の構成

ここで、全9章で構成されている本書の内容を簡単に紹介します。

序盤は心構えや手順などの全体的な説明です。第1章は「読者の迷い」と題し、原則「読者のことを考える」に則り、文章のどこが直すべき点かを説明しています。この章の印象的な内容の一つに「表記の統一」があります。文章を書くとき、その内容が最も重要であることは言うまでもありませんが、普段私たちは体裁を軽視しがちではないでしょうか。しかし、書いたことがきちんと読者に伝わるためには、体裁も大切な要素であり、これらを軽視しない態度が重要なのだと反省させられます。第2章では文章を直す作業工程を説明しています。この章は作家ならではの視点やコツが満載で、

これまで何となく作業をしていた人にはそれが明確になり、すでに基本を知っている人にとっても新しい気づきを与えてくれる内容になっています。これまで私は、文章の点検と言えば計算などを追いつつ一通り読み返すことが多かったのですが、ここでは毎回、誤字脱字、数式、指示語、索引、といった具合に違う観点を定めてそれに集中して読み直すことが推奨されています。これは文章だけでなく、さまざまな場面で有効な点検方法だと感じました。これに関連して、声に出して読む、場所を変えて読む、疲れているときに読むなど、読み方が単調にならないようにする工夫が終盤の第7章で具体的に紹介されています。

中盤は各論です。第3章では適切な語句の選び方、便利な言い回しを、第4章では誤解を受けない文章へ書き直す方法を説明しています。私たちが適切な語句を選び、論理的に文章を書いているつもりでも、読者がそう受け取ってくれるかどうかはわかりません。ここでは自分の文章を客観的に見直す方法を学べます。悪い例とその改善例が豊富にあり、ちょっとした違いで文章が全く違うものになることがわかる興味深い内容になっています。もちろん、部分的な修正だけでは思わぬミスをすることもあります。第5章では大局的に文章全体を眺めて、そのバランスをとる方法について説明しています。

終盤では文章を書き直す際のさまざまな注意点を説明しています。中でも第6章の、レビューを依頼し客観的な意見を求めることの重要性は印象的です。前述のとおり普段私たちは内容ばかりに目が行きがちで、レビューにおいても体裁は軽視しがちです。しかしここでは、内容はもちろんのこと、体裁も含めて指摘をたくさん受けることの意義がしっかり説明されています。また、その指摘を理性的に受け入れ、レビューアによる修正にならないよう著者の責任で修正するという、フィードバックの反映のさせ方も参考になります。この書評も実際に同僚にレビューをしてもらい、そのフィードバックの一部を反映させています。

最終章は推敲のチェックリストになっています。これは本書を通読し、実践するときに役立ちます。箇条書きのリストでありながら、項目を見ればそこで述べられていた内容をきちんと想起することができ、本書の文章が読みやすいものであったことを改めて感じることができます。

○ 本書を読んでもらいたい人

私たちはこれまでの経験からくるその人なりの文章の癖を持っています。それは必ずしも直すべきことではなく、時に文章の味として読者に良い印象を与えるものでしょう。しかし、自分にとっては自然な言い回しであっても、時には読者に読みにくい印象を与えているかもしれません。それを自分で判断するのはなかなか難しいことですが、本書はそれを客観的に教えてくれます。本書の主張である「読者のことを考える」は、文章を書き慣れている人にとって、一見当たり前にも思えます。しかし、言うは易し行は難しとはまさにこのことで、私たちはなかなかそれを実現できていないのではないのでしょうか。自分は実現できていると思っている人も、本書を読んでもみると、自分の方

法と同じ箇所があって安心するとともに、新たな方法が提示されている箇所もたくさんあって、今後書く文章がより洗練されたものになると思います。

本書は文章を書くすべての人にお勧めできます。とりわけ、文章を書くことに自信が持てない人は、本書を参考に文章を書き直してみると、少しは自分の文章に自信を持つことができることでしょう。また、学生を指導する立場にある先生は、本書の文章や具体例を引用することで、これまで感覚的に行っていたかもしれない学生への文章校正の指摘が、論理的で学生に納得してもらえるものになることでしょう。

○ 結びにかえて

私は文章を書くのが得意ではありません。数学でないとなおさらです。語彙力や表現力が乏しいために、伝えたいことがうまく表現できず、文章に自信が持てないのが原因です。すると、伝わっているかどうかが不安になり、カッコ書き、無駄な修飾、繰り返し、補足説明が多くなり、結果長く読みにくい文章を書いてしまう、という負のスパイラルに陥ります。これらは周囲からよく指摘される私の文章の癖で、本書でも良くない文章の例として挙げられています。今回自分の文章を直す良いきっかけになればと、この書評を引き受けました。本書は無駄がなく明快に書かれていて、内容が頭にスッと入ってきます。これまで、「文章のこの部分を直したい」と思っても、どうすれば良いのかわからずただモヤモヤしていた私に、本書は光を射してくれたように感じます。この書評の第一稿はとても見せられたものではありませんでしたが、本書を実践して書き直し、勇気づけられました。みなさんはこの書評にどのような感想を持たれたでしょうか。もし読みやすかったなと思われたなら、それは本書がいかに優れているかを表しています。もし読みにくかったなと思われたなら、それは私の未熟さゆえです。すべきことはわかっているつもりでも、やはり文章を書くのに語彙力や表現力は欠かせません。これからも本書を片手に精進したいと思います。いずれにしても、この書評を読んで本書を手にする方が一人でもいれば幸いです。